

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02513

研究課題名(和文) カフカース諸語とロシア・ソヴィエト言語類型論の研究

研究課題名(英文) Caucasian Languages and Russian-Soviet Language Typology

研究代表者

柳沢 民雄 (Yanagisawa, Tamio)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：80220185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はカフカース諸語の研究によって、ロシア・ソヴィエト言語類型論を解明することである。2つの課題を解明した：(1)ロシアにおける音韻論の発達と(2)ロシア・ソヴィエト言語類型論の歴史である。(1)に関して、次のことを明らかにした：P. K. ウスラルとN. K. ヤーコヴレフはモスクワ音韻学派とプラハ音韻学派の基礎を創った。(2)に関しては、ソヴィエトで発達した言語類型論と西欧で発達した言語類型論を比較しながら前者の特徴を纏めた。特に、両類型論の理論的代表者である、I. I. メッシュャニーノフとR. M. W. デクソンの異なる言語類型に関するアプローチを比較した。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present study is to elucidate the Russian-Soviet language typology in terms of the Caucasian languages studies. I elucidated two main topics: (1) the phonological development in Russia and (2) the history of the Russian-Soviet language typology. As regards the first topic, I conclude as follows: P. K. Usler and N. K. Yakovlev laid the foundation of the Moscow phonological school and the Prague phonological school. With respect to the second topic, I compared the Soviet language typology with the language typology developed in West Europe. Specifically, I dealt with the different approaches of two representative typologists, I. I. Meshchaninov and R. M. W. Dixon.

研究分野：言語学

キーワード：カフカース諸語 言語類型論 ロシア・ソヴィエト

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初までに行われていた研究は、北西カフカース諸語に属するアブハズ語の記述研究(2009-2011年の科学研究費補助金基盤研究(C))と北西カフカース諸語の類型論的研究(2012-2015年の科学研究費補助金基盤研究(B))である。これらによってアブハズ語の辞書と文法の作成(T. Yanagisawa (2010) *Analytic Dictionary of Abkhaz*. ひつじ書房; T. Yanagisawa (2012) *A Grammar of Abkhaz*. ひつじ書房)、及び北西カフカース諸語の音韻調査(アクセント調査も含む)と典型的な特徴の調査を行った。北西カフカース諸語のアクセントについては、ウビフ語のアクセントを調査し、アブハズ語と同じアクセント原理がウビフ語にも働いていることを確かめた。これから北西カフカース祖語のアクセントを再建する資料を得ることが出来た。

音韻論については、カフカース諸語の文法作成の過程で19世紀のカフカース研究者であるP. K. ウスラル(1816-75)が、音声研究を行っている。その後、20世紀にロシアの言語学者のN. F. ヤーコヴレフ(カフカース諸語と音素論を研究)が、ポウドゥアン・クルトネとは異なる立場から音素論を発展させている。

言語類型論に関しては、カフカース諸語の資料を用いた研究がソヴィエト時代の40年代に行われていることが知られていたが、一般に概説的な紹介であった。カフカース諸語の知識に基づく、ソヴィエト類型論の検証は行われなかった。これが研究開始段階での背景である。

2. 研究の目的

これまで集積したアブハズ語を含めたカフカース諸語の資料を基にして、ロシア・ソヴィエト言語学の遺産である言語類型論を解明することを目的とする。主に2つの分野を対象とする：

(1) 音韻論の分野：ウスラルとヤーコヴレフの音素概念はカフカース諸語の中でいかに発達し、研究されたのか。

(2) 形態論と統語論の分野：メッシュャニーノフを中心とするソヴィエト言語類型論の研究におけるカフカース諸語の役割を明らかにし、40年代にメッシュャニーノフによって提唱された言語類型の進化的な理論である「段階理論」を解明する。

3. 研究の方法

(1) 音韻論の分野に関しては、ウスラルのカフカース諸語の文法、特に『カフカース民族誌・言語学1. アブハズ語』(1887)を用いて、ウスラルの音素概念の萌芽を調査する。次に、ヤーコヴレフの著作『カバルダ語の音声一覧表』(1923)と論文「アルファベット建設の数学的公式(言語学理論の実践的応用の試み)」(1928)、及びヤーコヴ

レフのカフカース諸語の文法を用いて、音素概念の形成過程を調査する。また、それ以前のポウドゥアン・クルトネやシチェルバの音素論と比較して、ヤーコヴレフの音素論の特徴を明らかにする。ヤーコヴレフの音素論が後のモスクワ音韻学派やプラハ音韻学派にどのように影響を与えたかを調査し、ヤーコヴレフの音素論の独自性を検証する。

(2) 形態論と統語論の分野：ソヴィエト時代の40年代に活発になった、メッシュャニーノフを中心とする言語類型論の著書(特に、メッシュャニーノフの『一般言語学：語と文の発達における段階性的の問題に寄せて』(1940)等)の中で、カフカース諸語(アブハズ語、カルトヴェリ語、山岳カフカース諸語)の資料がどのように用いられているかを検証する。また、このメッシュャニーノフ的な類型論と西欧の言語類型論を比較することによって、ソヴィエト言語類型論の特色を調査する。これは特に、ソヴィエト類型論の代表者であるメッシュャニーノフの著書と、現代の欧米の言語類型論の代表者であるR. M. W. Dixon(彼の著作*Ergativity* 1994を用いる)の考えを比較することによって行う。

4. 研究成果

(1) 音韻論の分野：

1. ウスラルの『カフカース民族誌・言語学1. アブハズ語』にある「ウスラルの草稿メモ」の中で音素概念の萌芽を見つけることができた。彼は文字のないカフカース諸語のためにアルファベットを作成する過程で、音素概念に辿り着き、母語話者が音声を音素と区別することを述べている。ウスラルは「音素」という言葉は使わないが、そこにはその萌芽が見られる。ウスラルは、音素概念を発達させることはなかったが、それはヤーコヴレフによってなされた。

2. ヤーコヴレフはウスラルの音素概念の萌芽を確認し、それを音素論として発達させている。ヤーコヴレフの『カバルダ語の音声一覧表』(1923)と「アルファベット建設の数学的公式(言語学理論の実践的応用の試み)」(1928)を調査する中で、彼の音素論(また音素論を基にした、文字をもたない民族のアルファベット作成の理論、正書法理論)が非常に優れていることを発見した。ヤーコヴレフは、ポウドゥアン・クルトネやシチェルバの音素を心理的なものと見なす考えを批判し、音素が区別されるのは社会的に作り上げられた文法体系としての言語の中で、これらの音が独自の文法機能を果たしているからであると述べ、機能的な立場から音素を定義している。こういったヤーコヴレフの音素論には、その後の2つの音韻論の学派である、モスクワ音

韻学派（アヴァネーソフ、シードロフ等）とプラハ音韻学派（ヤコブソン、トルベッコイ）の基本的な考えがすでに含まれている。例えば、音素の強い位置と弱い位置、音素系列、弁別的要素、中和、相関などの概念である。

ヤーコヴレフの音素論は未だあまり研究対象にならないが、これは彼の音論関係の資料がほとんど手に入らないことにも一因がある。彼の音についての唯一の書である『カバルダ語の音声一覧表』（1923）は、残念ながらロシア語の手書き原稿をガラス複写方式で印刷したもので、100部しか出版されなかった。これを利用することはかなり困難であったので、本研究では、天理大学附属天理図書館所蔵のこの稀観書を全て活字化し、それをテキスト化した。また、ヤーコヴレフの音素論については、ポール・ギャルド著、柳沢民雄訳『ロシア語文法：音韻論と形態論』（2017、ひつじ書房）の訳注にロシア語の音組織と正書法の説明として、一部記した（pp. 531-533, 535, 546-547）。

3. 北西カフカース諸語のアクセントについて：ウビフ語とアブハズ語の比較によって北西カフカース祖語のアクセントを再建することが可能であることは以前の科研費補助金の研究によって確認していたが、ここで見られたアクセント配列の原理は、バルト・スラヴ語のアクセント原理と共通なことを発見した。これとの関連で、リトアニア語のアクセントをソシュールの研究（*Accentuation lituanienne*. 1896）から見なおすこととして、これを日本歴史言語学会のシンポジウム「ソシュールと歴史言語学」（2017）に「ソシュールのリトアニア語アクセントの研究」として発表した。これは後に、『ソシュールと歴史言語学』（2017、大学教育出版）の中の「リトアニア語アクセントの研究」（pp. 141-196）として纏めた。

（2）形態論と統語論の分野

1. メッシャニーノフを中心とする言語類型論と欧米の言語類型論（特に R. M. W. Dixon, *Ergativity* 1994）を比較し、ロシア・ソヴィエト言語類型論の特徴を検討した。特に、言語類型の変化の観点から、メッシャニーノフの「段階理論」と西欧の言語類型論者の考えを比較した。

結論は次の通りである：メッシャニーノフの用いているカフカース諸語の例文は基本的な構文に限られているが、正確である。彼の議論には、ソヴィエト時代にしばしば見られた、言語構造と社会的な階級制度とを直接に結びつけるというような乱暴な議論は見られない（こう言ったイデオロギー的な見解は、例えば、N. F. ヤーコヴレフの後期に書かれた、『アブハズ文章語文法』（2006）に見られる）。特に、能格構文から

主格（対格）構文への変化に関しては、能格言語と対格言語の構造からその類型変化を考察しており、議論そのものは理解しやすく、合理的な理論展開が行われている。メッシャニーノフは、言語類型は一定方向に進化すると考えているが、Dixon は循環的な類型の変化を考えており、この点で両者は異なる。能格構文から主格（対格）構文への変化の説明はメッシャニーノフにより説得力があるように思われる。西欧での言語類型論の研究が本格化するのには 20 世紀の 70 年以後であることを考えると、1940 年代にこのような研究がソヴィエト国内で行われていたことは注目すべきである。

この結論は、「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語：ソヴィエト類型論の歴史概説」として雑誌『類型学研究 5』に掲載する予定である。

さらにこの作業の過程で、西欧の言語類型論の代表的な著作である、Dixon (1994) *Ergativity* を紹介すべきとの考えから、これを翻訳する作業を行った。この翻訳は、デクソン著『能格性』（共訳）として刊行される予定である。

引用文献

- Мещанинов, И. И. *Общее языкознание. К проблеме стадильности в развитии слова и предложения*. Ленинград. 1940.
- Услар, П. К. *Этнография Кавказа. Языкознание. I. Абхазский язык*. Тифлис. 1887.
- Яковлев, Н. Ф. *Таблицы фонетики кабардинского языка*. Москва. 1923.
- Яковлев, Н. Ф. *Математическая формула построения алфавита. Культура и письменность Востока. 1*. Москва. 1928, стр. 41-64.
- Яковлев, Н. Ф. *Грамматика абхазского литературного языка*. Сухум. 2006.
- Dixon, R. M. W. *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Saussure, F. de, *Accentuation lituanienne. IF 6. Anzeiger*.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. Tamio Yanagisawa, BOOK REVIEW: George Hewitt, *Abkhaz: A Comprehensive Self-Tutor. Japanese Slavic and East European Studies*. 査読有、Vol. 36. 2015. 121-128.
2. 柳沢民雄「北西カフカース諸語のアクセント体系の比較（1）」言語文化論集, 査読なし、Vol. 37-1. 2015. 77-90.
3. 柳沢民雄「北西カフカース諸語のアクセント体系の比較（2）」言語文化論集, 査

読なし、Vol. 37-2. 2016. 89-102.

4. 柳沢民雄「ロシア語文法ノート」言語文化論集, 査読なし、Vol. 38-1. 2016. 51-79.

5. 柳沢民雄「ウスラルとヤーコヴレフの音素概念の発達について」カフカース諸語とロシア・ソヴィエト言語類型論の研究(平成 27~29 年度科学研究費成果報告書)査読なし、16-27, 2018.

6. ヤーコヴレフ、柳沢民雄編「ヤーコヴレフの『カバルダ語の音声一覧表』モスクワ・1923 のテキスト」(平成 27~29 年度科学研究費成果報告書)査読なし、29-63, 2018.

7. 柳沢民雄「ロシア・ソヴィエト言語類型論とカフカース諸語：ソヴィエト類型論の歴史概説」査読なし、類型学研究 5. 近刊

〔学会発表〕(計 1 件)

1. 柳沢民雄「ソシュールのリトアニア語アクセントの研究」、日本歴史言語学会のシンポジウム「ソシュールと歴史言語学」、2017 年 3 月 19 日、研究社英語センター(東京都)、招待講演

〔図書〕(計 2 件)

1. ポール・ギャルド著、柳沢民雄訳・注ひつじ書房、『ロシア語文法：音韻論と形態論』2017, 783

2. 神山孝夫、町田健、柳沢民雄著、大学教育出版、『ソシュールと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ 1)』2017, 274 (141-196)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳沢民雄 (Yanagisawa Tamio)

名古屋大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：80220185

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし